

出國報告（出國類別：參加學術會議）

發表題目：真杉靜枝與其殖民地台灣描寫的變化
——以 1940 年代為中心——

服務機關：政治大學台灣文學研究所

姓名職稱：吳佩珍助理教授

派赴國家：韓國

出國期間：2010.8.17-8.21

報告日期：2010.8.18

摘要

2010年8月17日至2010年8月21日期間，本人赴首爾參加韓國高麗大學以及日本筑波大學合同會議，收穫良多。本人與日、韓學者之間學術交流已經行之有年，本行目的在於借鏡觀察日、韓近年東亞研究以及共同研究的成果。

本人此次所發表題目：「真杉靜枝與其殖民地台灣描寫的變化——以1940年代為中心——」與本次合同會議主旨吻合，同時也透過這次學術交流，讓台、日、韓學者對於彼此的亞洲研究現況有更進一步更精確的掌握。此外也因此契機促成韓國學者決定今年3月與11月至台灣交流。

本文

2010年8月17日至2010年8月21日期間，本人赴首爾參加韓國高麗大學以及日本筑波大學合同會議，收穫良多。本人與日、韓學者之間學術交流已經行之有年，本行目的在於借鏡觀察日、韓近年東亞研究以及共同研究的成果。

因近年來東亞研究已經蔚為亞洲各國學術風潮，特別是越境的合同發表，更是近年來亞洲各國工作坊以及學術會議的趨勢。本人此次所發表題目：「真杉靜枝與其殖民地台灣描寫的變化—以1940年代為中心—」與本次合同會議主旨吻合，同時也透過這次學術交流，讓台、日、韓學者對於彼此的亞洲研究現況有更進一步更精確的掌握。此外也因此契機促成韓國學者決定今年3月與11月至台灣政治大學台灣文學研究所交流，可說是本行最大的收穫。

本次會議的發表原文如下附件。

真杉静枝とその植民地台湾描写の変容

—1940年代をめぐって—

政治大学台湾文学研究所（台湾）

呉佩珍

1. はじめに

真杉静枝は1900年に福井県に生まれ、のちに父・真杉千里と家族と一緒に台湾に渡り、定住しはじめた。21歳のとき、親決め結婚をさせられ、その後、その生活に耐えられなく、大阪の祖父母に出奔していた。その後、大阪毎日新聞の記者になり、武者小路実篤と知り合い、日本文壇に登場した。彼女は、台湾での生活経験を有する少数の日本女性作家の一人である。

デビューした当時、すでに台湾を題材としている作品を創作していた。最初の作品集『小魚的心』（1938）に収録されている「南海の記憶」、「南方の墓」などは、その例である。1937年日中戦争の全面勃発によって、台湾が南進基地として前面化とされ、真杉静枝の台湾描写にも変化が現れていた。1941年に出版された『ことづけ』と『南方紀行』は、1937年日中事変以後、南進基地としてますます重要視されていた台湾を意識し、創作されていた作品集である。この時期、「国策小説」のようなものが殆どで、台湾の皇民化運動を鼓吹する作品が多い一方、初期の「植民地における女性」の課題は依然として中心となっている。

『ことづけ』は、当時の「日本の南進政策によって南方を扱った多くの文学作品が刊行されていく中で増刷を重ね、42年9月には四刷3000部を発行するに至った」と言われている¹。この時期の「南進関係」小説の人気は、同年6月、『南方紀行』がさつそく出版されていた事実からかいま見せる。

1945年8月日本の敗戦と同時に、台湾が日本の植民地から離脱した。その後、真杉静枝がみずからの家族史という視点から、日本が領台以後の歴史と重ねあわせながら、「台湾」を描いていた。明治末期に台湾に渡って、日本敗戦に伴い、引揚者になった左門治と千代という夫婦の一連の物語、「花樟」（1946年）、「左門治と千代」（1947年）と「老脚の賦」（1948年）が、「帝国日本」と「植民地台湾」との関係を歴史の線軸で見直したものである。本発表の目的は、「花樟」、「左門治と千代」をとおして、真杉静枝の家族史からみる「台湾殖民地史」、そして台湾描写の変容を検証することにある。

2. 左門治と千代物語—「花樟」、「タバニ事件」をめぐる家族史

¹ 河原功「解説」『ことづけ』（ゆまに書房、2000年）、3頁。

「花樟」²（『東北文学』1946.3-4）、「左門治と千代」（『東北文学』1947.1）と「老脚の賦」（『仇ごよみ』1948）は日本語が敗戦直後、真杉が台湾を描く作品である。「花樟」と「左門治と千代」は、作品の結末の注記によると、それぞれ『花樟物語』第一章と『花樟物語』第二章となることがわかる。また、物語の構造からすれば、殖民地台湾にわたった前田左門治と千代夫婦、そして長女八重と次女龍子を中心としているのである。人物設定という点からすれば、「花樟」（1946）、「左門治と千代」（1947）と「老脚の賦」（1948）はシリーズ作品といえよう。人物設定と物語の概要からすれば、真杉家一族をモデルにした作品だと推定できる。

「花樟」とその続編「左門治と千代」の概要は次のようです。

台湾南部の部落「旧城」（註：現左營、台湾南部）に住む前田一家は、妻千代が夫左門治に内証して花樟木の箏笛と鏡台をそれぞれ長女八重と次女龍子のため、嫁入り道具うとしてこしらえた。「花樟」の家具を持つことは部落内の日本人共同体には一種の身分象徴のと同時に、また「内地」に戻るとき、「故郷に錦を飾る」という見栄の意味合いを含まれている。

次女の龍子は、このようなものは「立派すぎる」と思い、満足していた。それに対して、夫の左門治は「これで家の中を『台湾』に嚇かされてゐるやうな気がする」（13）という感想をもらしながら、妻の気持ちを察しなくもないとされている。「花樟」は、同じ部落の日本人医者 of 芸者上がりの妻が自殺し、発見されたという結末となる。その続編「左門治と千代」は、長女八重が台北高等女学校から旧城に戻り、母千代が自分たちのために購入した花樟木の箏笛と鏡台を見ると、「辱められたやうな、赤い顔をして泣き笑ひの表情になった丈け」で、「急に言葉を失ひ、小さくなつて部屋の隅の方に身を寄せて坐」った。その後、父左門治は急に公学校の校長から、台湾人学生の無賃乗車をかばったり、台湾人女生徒の時間外授業を計ったりとしたことを理由に免職された。これは、左門治が渡台以来、教職を免じられたのは二度目である。左門治は七年前、最初免職された原因もこれに近いのである。それは大正四(1915)年であり、妻千代と次女龍子が台湾に渡ってきた年でもある。1915年にはちょうどタバニ事件が起きて、台湾南部は政治情勢は緊迫していた³。当時、左門治は台中州下社頭公学校長を勤めていたが、学校の衛生設備に要求したことに對し

² この作品の所在は呉亦昕氏の教示によるものである。

³ タバニ事件は1915年に台湾台南タバニに起こった大規模の武力抗日事件である。首謀者余清芳、羅俊と江定は「西来庵」という寺を拠点として、蜂起したため、また「西来庵」事件ともいわれる。1915年8月22日に余清芳が逮捕され、8月25日より臨時裁判が行われた。1957人は「匪徒刑罰令」によって告発され、そのうち1413人起訴され、886人は死刑判決され、453人が禁錮判決を言い渡された。厳罰のあまり、帝国議会の注意によって、95人の死刑を執行された後、残りの死刑囚は有期禁錮へとなった。（日本語訳は発表者による）
『台湾大百科全書』

<http://taiwanpedia.culture.tw/web/content?ID=3730&Keyword=%E5%99%8D%E5%90%A7%E5%93%96%E4%BA%8B%E4%BB%B6> (2010年8月11日確認)

て、視学が「阿緞廳下に先日蜂起したる匪徒の件につき、台湾人学童等の綴方に緊急の注意を」要望した。つまり、生徒の綴方を利用して、台湾人家庭内の不穏分子を摘出しようと考えていた。この確執によって左門治が清水巖公学校に左遷されてしまった。のちにこの新しい土地で、「火事」の警鐘を土匪襲来と取り違い、千代が社頭派出所までに駆けつけ、救援を求めた。結局、社頭より発した救援電信によって台中より、数多くの救援隊が到着したが、空騒ぎと判明されたこれによって、左門治が免職され、自殺まで図ったが、千代に気づかれて止められた。

台湾における左門治と千代一家の物語は、以上のようなものであるが、「老脚の賦」は舞台は1945年の東京に変わり、日本の敗戦によって台湾から引き揚げた左門治、千代、次女の龍子とその次男哲雄がさまざまな苦労を重ねて鎌倉にたどり着いて長女八重に身を寄せたという経緯である。

この三作を読めば、現実のなかの真杉の家族—長年来、台湾で暮らしてきた両親、妹とその子ども—をモデルにしたものが明らかになる。つまり、一見、真杉静枝の家族史のようなものであるが、実際に真杉が描こうとしている日本の「台湾殖民史」である。「花樟」とその続編「左門治と千代」における台湾描写は、ほぼ日本植民地政策をそって描いたものなので、「台湾植民地私史」という視点がから描いているものともいえよう。

とくに注目すべきなのは、二作の結末からわかるよう、真杉静枝が自分の家族が台湾に移住してから、日本に引き揚げるまでのいきさつを、「花樟物語」と命名するのである。つまり、台湾植民地でのこの一族の物語は「花樟」を巡っていることが明らかになっている。

樟木は台湾の特産で、樟脳の原材料として知られているが、また重要な経済的価値を持つ植物でもある。「花樟物語」においては、樟木ないし樟脳、それから「花樟」の由来について詳しく紹介されている

樟樹の中でも、この狭い台湾島に密生してある樟樹のうち、芳樟と牛樟と二種類があつて、樟脳にするには芳樟でなくてはならない。牛樟には脳分があまりないのである。台湾の専売局が大正七年頃から、この芳樟の殖林に力を入れはじめてあるので、一方、牛樟の方は、天然に平地近くにも老樹となつて残つてゐるのが多くあつた。多分津軽さんのやうな商人の眼が、この牛樟に向けられたといふわけであらう。脳を採るのではなく、その独特の美しい木理を生かして、美術的な板材としての需用を思いついたのであつた。木材を板に挽いて、その木理を生かす爲の材料になつたものを、「花樟」と称ぶやうになつたのである。(6頁)

この引用文から分かるように、「花樟」という名称は、牛樟から来たもので、またこのようなものを、津軽のやうな商人が花樟と命名した。この時期は、ち

ようど第一次欧州大戦の影響で世界市場の不景気が現れてきた頃だとわかる。⁴しかしながら、なぜ「花樟」がそのように日本人部落で騒がれて、もてはやされたのであろうか？樟脳は基本的には台湾植民地の重要な経済植物であり、その産量と品質は世界を誇るものでもある。「樟脳は、台湾産のものが、獨逸製人造樟脳の跋扈してゐる世界市場へ出て、立派にその需要量を勝つてゐるといふ風で、台湾特産品といふよりは、東洋の一つの誇りになつてゐた」⁵。日本が1895年領台し、1899年樟脳専売局の官制の命令はさつそく明治天皇によって下された。(資料1)樟樹と樟脳関係の新聞報道は台湾官報『台湾日日新報』が創刊した当時、さつそく現れ、また、樟脳専売に至るまでのいきさつからわかるように総督府がいかにこの経済植物を重要視していたことを裏付けている。(資料2「樟脳専売瑣談」『台湾日日新報』)

経済価値の高い樹木と思われはじめて、樟木製の家具を手に入れることによって一種の「ソーシャルステータス」への裏づけと考えられる。植民地における日本人共同体のヒエラルキーがもともと厳しかったため、その「経済価値」から「身分価値」への転嫁効果が望まれているのである。それで、津軽のような商人が現れ、経済価値のより低い「牛樟」を「花樟」という華やかな名称に切り替えることによって日本人共同体における上述したな心理構造の弱みをつきとめて、暴利を獲得しようとしていた。「『花樟』はまだ装飾用でもなく、また「家具としての実用でもない」、一種投機的な意味以つて、異郷暮らしの貯金帳にとつて代わつたやうな入り方で、中流所の月給とりの家々に配りつけられてゐたのであつた」⁶。

また、「花樟」商人が台湾の日本人共同体におけるこのような競い合う心理を利用し商売目的で装飾用でもない、実用的でもないものを、台湾の日本人家庭に売り付ける実況は、前田家の近所の主婦の口を通じて、次のよう語られている。

津軽さんから、月賦払ひで買つていらつしやる事を、何方のお宅でも内緒になさるのね。私の家ぢや、別段そんな事少しも秘密にはなりませんねわ。—それにしてもね、私おかしい思ひますのよ。この一二年の間に、津軽さんみたいな「花樟」専門の商人が、この台湾にどれ丈け殖えたかしれませんのですつてね。みんなお役所へ行つて主人連中に売り込んださうですけれど。—つまり、この方がずつと有利ですつて云ふんですよ。内地へ持つて帰ればたいへんな、値打ちですからつてね。台湾生活十年以上になる人で、この台湾特産の花樟を持たずに内地へ帰つては、恥ですよ。—なんて津軽さんは、まるで保険の官給するみたいなことを云ふんですつて。それですすめて歩いてゐるんで

4 「花樟」(『東北文学』1946.3-4)、5-6頁。

5 同前、6頁。

6 同前。

すよ」(下線筆者、4頁)

上の引用文からわかるように、「花樟」のような商品は、実用価値あるいは経済価値より、結局殖民地台湾における「月給取り」の日本人の虚栄心を満足させるために誕生した「台湾特産」であろう。「花樟」が家に置かれることによって前田家のみすぼらしさを引き立てることは、長女八重が台北から戻って、母親が購入した「花樟」道具を見たときたん漏らした感想からうかがえる。「私たちの家つて、なんて、暗い、汚らしい貧乏くさいものなんでせう。なんだか私は、今はじめてみるやうな」という。妹龍子は「だつて、御自分の家じゃあないの」⁷といったとき、八重はさらにこのように答えた。「自分の家でなければ、他人の家なら、どんな家だつて、大して不満には思わないわ。こんな箒箒だつて、少しも審美的には、とりえはないわ。無作法な成金好みよ。この家にはいよいよおかしなものだわ。どぎつくて、…」⁸。つまり、「花樟」道具は自分の家とはいかに不釣り合い、そして強烈なコントラストを現しているのかがうかがい知れる。また、このような花樟道具を購入するため、母親の千代は「一生懸命にお仕事をしたお金を、順に毎月払ひ込んで行つて、二十ヶ月払へば」なりません。成金趣味ほどという見栄えを望むという殖民地暮らしの「サラリ階級」の日本人心理の一側面がうかがえる。

2、左門治の視点—非「支配階級」からみる「台湾殖民地支配」

左門治が日記の中で妻千代が花樟道具を購入した一件に対して、このように述懐した。

なれど 妻千代の心中も亦可憐といふべし 彼女にして 亦その器の如く、我等の台湾生活より何ものかを克ち得んものと乞ひ希ふものなるべし。

(中略) 看よ、本日よりわれが清潔を以つて誇りとせし家の内に、陋浅にして毒々しき未開未熟の作品入り来られるを。一瞥の瞬間にして、われこの家具類の嫌悪すべき甚だしきなるを感ず。これこそは現下台湾の現実をそのまま象徴せるものなりと謂ふべく。この事をもし妻にあからさまに云つて、それ難詰せんか、彼女は即座に答へて曰ふべし。『せつかくの台湾暮らしなれば、何物かを得て、内地土産としたし』と。(中略) 台湾未だに未開地なり。共に正しき力をつくしてこそ幸福なれ。急ぎ一個の利を得んとて、実の青きを構はず、美術的にも、又、日本家屋にとつての調和の上にも、不完全なるをも顧ず、我が所有として内地へ持ち帰らんとす。現下のこの土地の行政官達、みな是なり、誰れか一人、丹心を留取するなら

⁷ 「左門治と千代」74頁

⁸ 同前。

上記の左門治の心中からすれば、二点が分かる。一つは、「花樟」家具は「成金趣味」でそれがほしがるとは、まさに台湾の行政官に通じるところがある。また、左門治からすれば、「花樟」は「後進的な」台湾を象徴し、「聖潔」を誇る日本家屋にふさわしくない。左門治が台湾が「未開」な土地としてみる「殖民地者」のまなざしが「花樟」を通じて、反映されている。左門治の考えは、「下層階級」の日本「殖民地者」の一側面を現している。つまり、上級官吏が台湾という土地から何もかも剥奪し、利益先行の植民政策へ批判しながら、「後進的」「未開的」という見下す目線で殖民地台湾を見ていた。またこの土地を向上させ、開発させることを自らのような「植民者」の責任と自認するのである。

1915年に起こった「タバニ事件」という抗日事件がきっかけで、左門治が左遷された。その原因も上述したように、「殖民地台湾」政策をめぐる、上官と意見の不一致からきたのである。タバニ事件が起きた当時、左門治は台中州下社頭公学校長⁹を勤めていたが、台湾南部は政治情勢は緊迫していた。だが公学校は「台湾人子供達のトラホーム、梅毒性湿疹はいよいよこの庄内に蔓延」という状態に落ち「州に請求せし学童衛生用具はいまだ来らず、求めんにも当地にしては術もなし」¹⁰という。ちょうど巡視に来た新視学に対して、学校の衛生設備に要求したが、視学が「阿緱廳下に先日蜂起したる匪徒の件につき、台湾人学童等の綴方に緊急の注意を」要望した。つまり、生徒の綴方を利用して、台湾人家庭内の不穏分子を摘出しようと考えていた。それにたいして、左門治が「児童をとほして、日本政府の施すべきは、自愛のこの一路ならずや、サーベル政治はよろしくありませんよ。」と言り返した。視学が興奮して、次のように怒った。「殖民地にありては現下、教育者として、行政官の一人なり、よくここ得られよ。」¹¹。

つまり、殖民地教育方針と殖民地支配のどちらか優先させべきなのかをめぐる論争ともいえよう。左門治のような「理想主義者」で、そして支配の実権を持っていない「下層階級」は、厳酷な殖民地の不穏な情勢に直面するとき、その政策に異議を唱えたとしても、敗北する運命になるのも必然的な結果といえよう。

現時点のまとめ：

左門治の「花樟」、そして「タバニ事件」への批判は、暗々裏日本の台湾における植民地政策への批判ともいえよう。「樟脳」が必要とされ、より多く樟

⁹ 公学校は台湾人児童のために設けられた国民義務教育を受けさせる学校である。日本人児童が通うのは小学校という。

¹⁰ 「左門治と千代」86頁

¹¹ 同前。

木林を増やすため、「原住民」をその元来の生息地から追っ払った(資料3「蕃族物産」『台湾日日信報』)。佐久間左馬太総督の「五年理蕃計画」は、まさに「樟脳事業」を拡張するための経済要素に左右されたものといえよう¹²。また、樟木を介して、行われた「経済搾取」は台湾の住民にとどまらず、「殖民地者」の下層階級にも及んだ。「脳分」の少なく、経済価値少ない「牛樟」を「花樟」という華やか名前の改装によって売り付けられ、「二十カ月」の分割でやっと入手することが出来る。「タバニ事件」は、八百人以上の無差別の死刑判決はあまりにも過酷で、日本帝国議会もそれに対して注意した。この抗日事件は、後に1930年「霧社事件」を除いて、漢民族の最後の大型抗日武力事件となり、それ以後の台湾抗日運動路線を変更させた。1920年文化協会の「社会運動」は「武力蜂起」を放棄し、「社会改革」という「温和的」な抗日路線となった。また、プロレタリア文学運動にも少なからぬ影響とも言える。たとえば、台湾の代表的な左翼文学者楊逵の出世作「新聞配達夫」(1934年)では「タバニ事件」における蜂起者への惨殺ぶり、そして当時の殺伐的雰囲気主人公楊君の頭に刻まれている描写が見られる。「平地蕃人」「総督府模範竹林」(1930年)など台湾関係のプロレタリア文学作品を創作した伊藤永之介が「模範竹林」も「タバニ事件」モチーフとしてのち台湾における労働運動とのつながりを描いて見せた。

「経済政策」と「武力征伐」という植民地政策への批判は、左門治の台湾暮らしの1915年と1922年の日記から読み取れるであろう。また、このような作品は、日本が敗戦の直後、直ちに元プロレタリア文学者が集結した『東北文学』で発表された意味もこれから探求しなければならないと思う。左門治と千代一家は、「殖民地」の日本人共同体の「下層階級」に属しながら、つねに辞令次第移動させられなければならなく、デラシネの生活を送っていた。それから、日本敗戦と同時に惨憺に極める「引揚者」となり、「内地」に戻っても、八重夫婦の仲に左門治たちの居候によつてもつれが生じ、安住の地を求めるため、また果てなく旅を続ける。この一家の殖民地台湾における「家族史」は、まさに日本の台湾における「殖民地史」の縮影ともいえよう。

今後の課題：

1・「花樟」「左門治と千代」における台湾殖民地政策批判と戦前、日本プロレ

¹² 「五年理蕃計画」は1910年台湾総督府の制定された台湾原住民に対する武力鎮圧の行動テーマである。1910年から1915年まで計画的に全台の原住民を武力鎮圧し帰順させると考えていた。しかし最初の征伐は北部のタイヤル族を目標としていたが、その抵抗は予想以上激しかったため、計画とおりに行かなかった。さらに1914年の「タイロコ蕃」征伐は、高齢70歳の総督佐久間が自ら戦場に向かい指揮を執っていた。征伐が終わり、佐久間は自ら天皇に「理蕃計画完成」と報告し、総督を解任された。1915年7月安東貞美が就任し、原住民の武力征伐政策を廃棄した。(日本語訳は発表者による)『台湾大百科全書』

<http://taiwanpedia.culture.tw/web/content?ID=3720&Keyword=%E4%BD%90%E4%B9%85%E9%96%93%E5%B7%A6%E9%A6%AC%E5%A4%AA>

タリア文学における「台湾描写」との近似性。

2、発表媒体『東北文学』と戦前プロレタリア文学運動とのかかわりの検証。

3、『東北文学』の執筆者と台湾の関連性：武者小路実篤、濱田隼雄、秋田雨雀、伊藤永之介など。